

『阿弥陀経』読解（上）

畝 部 俊 英

はじめに

この五、六年間にわたり、鳩摩羅什訳『仏説阿弥陀経』（以下、『阿弥陀経』と略称する）を、本大学及び他所において講読する機会が与えられてきた。その基礎的準備のために、梵文『阿弥陀経』（以下、梵文または Sm. Sūtra. と略称する）、チベット訳『阿弥陀経』（以下、チベット訳と略称する）、玄奘訳『称讚淨土仏撰受経』と常に対照しつつ、原文そのものの説意の理解に意を注いで、読解を試みてみた。幸い最近すぐれた研究や梵文和訳が次々と発表され、いろいろと教示にあづかったのであるが、その読解を進めるにつれ、幾多の問題が生じてきた。そこでなお検討の余地はあるにしても、それらの問題に対して一応卑見がまとまってきたので、御批判を仰ぎたいと思ひ、主なる二、三の問題について筆を執ることとした次第である。

原文そのものの説意の理解ということに重点があるので、漢文の理解という点から、中国、朝鮮の古い註疏を参照した以外、『阿弥陀経』が翻訳されて以後の、ある特定の教義にもとづく『阿弥陀経』解釈は出来るだけ持込ま

ないようにした。それは原文そのものの説意の理解ということを通して、經典に直参したいという意樂がはたらい
てのことであるが、およそいかなる經典であれ、經典そのものの原文の正しい理解があつてこそ、先覚者の方々が
その經典に対して、いかに苦心して経意の開顯に努められたかを知ることができると思うからである。

なお『阿弥陀経』に対する註疏・研究等は、古くより今に至るまで枚挙に暇がないほどであり、以下で記述する
点についても、既に論ぜられているのかもしれないことを、慮るのであるが、筆者自身の理解を確認しておくつ
もりで、あえて論文にしたことをおことわりしておきたい。

一 『阿弥陀経』の説意

『阿弥陀経』一經の説意の最重点は、重要な三か所に見出される「应当発願」なる釈尊の衆生への勧めの言葉
にあるように思われる。この釈尊の勧めの言葉をいかに理解すべきであろうか。この事について卑見を述べてみた
い。

『阿弥陀経』において、説主・釈尊は一体何を説かれたのであろうか。このような問いを今改めて立てるなら
ば、あるいは一笑に付されるかもしれない。

曰く、『阿弥陀経』は、釈尊自から極樂の依・正二報を讚歎し(讚極樂淨土)、そしてその極樂へ往生すること
を衆生に勧める(勸念仏往生)經であると。

『阿弥陀経』には、成程極樂が先づ讚歎されているが、しかし極樂へ往生することが、直ちに、勧められているとすることにについては、問題があるように思う。

『阿弥陀経』は、いわゆる正宗分に入ると、

爾時仏告長老舍利弗。従是西方、過十萬億仏土、有世界、名曰極樂。其土有仏、号阿弥陀。今現在説法。⁽²⁾

と、極樂世界と阿弥陀仏について説き出され（いわゆる略讚）、次に極樂の依報と正報が詳しく説かれる（いわゆる広讚）。

そして、極樂の依報と正報が説かれたのち、それを受けて、

舍利弗、衆生聞者、应当發願、願生彼國。⁽³⁾

と、以上のことについて聞くならば、「まさに願を發すべし、彼の國に生れんと願って」と極樂に向って生れんと願う願い―願生（心）の發起を、釈尊は衆生に勧めていられる。

続いて、名号を執持すること、一日乃至七日、一心不乱ならば、臨終の時に阿弥陀仏がもろもろの聖衆とともに來迎し、願生者は極樂国土へ往生するであろうことが述べられ、これを受けて、

舍利弗、我見是利故、説此言。若有衆生、聞是説者、应当發願、生彼國土。⁽⁴⁾

とある。

釈尊自から「我この利を見るが故に、この言を説く」といって、以上の所説を聞くならば、「まさに願を發すべし、彼の國土に生れんと」と、彼の極樂国土に向っての願生心の發起を、釈尊は衆生に重ねて勧めていられるので

ある。

ところで、梵文と対照して解説されているようである岩波文庫本の訓読以外は、これまでこの個所を、「若し衆生有りて、この説を聞かん者は、まさに発願して、彼の国土に生るべし」と読んできている。

このように読んでも「発願」の具体的内容が「生彼国土」であると了解することが正しいのであろうが、日本式訓読で「発願して、彼の国土に生るべし」と読んでいるうち、いつしか「発願して」が「発願して、そして」というように時間的経過をあらわすごとくに読み取られ、「発願して」、そして「彼の国土に生るべし」と分けられ、しかも「生るべし」に力点が置かれ、釈尊はここに「生るべし」と勧めていられると理解せられているようである。また「発願」の具体的内容が「生彼国土」であると一応分かっているにもかかわらず、「発願して、彼の国土に生るべし」と読んでいると、いつしか「彼の国土に生るべし」に力点があると思うようになるのではなからうか。

先の個所、

衆生聞者、应当発願、願生彼国。

は、極楽国土に向っての願生（心）の発起が勧められていると理解せられるであろうが、この個所、

若有衆生、聞是説者、应当発願、生彼国土。

においては、日本式訓読の影響も手伝って、どちらかといえば、極楽への往生が勧められていると見られてきたのではあるまいか。⁽⁶⁾

尤も既に中国の註疏と伝えられているもののこの個所の解釈にも「勸汝往生」⁽⁷⁾、「勸生彼国」⁽⁸⁾というように述べ

られているから、このような所からも往生の勧めという理解が生れたとも考えられる。

ところでこの二つの個所の梵文をみると、全く同じである。

初めの個所に相応する梵文は、

tatra khalu punaḥ Śāriputra buddhakṣetre sattvair prañihānaḥ kartavyam.⁽⁹⁾

(また実に、シャーリプトラよ、衆生たちによって、かしの仏国土に向って、「生れたいという」願(prañihāna)がおこされるべきである。)

とあり、⁽¹⁰⁾ 後の個所は、*prañihānaḥ* が *cittaprañihānaḥ* となっているが、

satkṛtya kulaputreṇa vā kuladhitrā vā tatra buddhakṣetre cittaprañihānaḥ kartavyam.⁽¹¹⁾

(つつしんで、善男子や善女人によって、かしの仏国土に向って「生れたいという」願いの心(cittaprañihāna)がおこされるべきである。)

とある。

全く同じ梵文であり、仏国土に向って「生れたいという」願いの心―願生心―が発起されることを、両文とも勧めているのである。

従って、この梵文によるかぎり、

若有衆生、聞是説者、应当發願、生彼国土。

は、「若し衆生有って、この説を聞かば、まさに願を発すべし、彼の国土に生れんと」と読むべきであって、「若

し衆生有って、この説を聞かん者は、まさに発願して彼の国土に生るべし」ではないのである。

どちらの個所も梵文の「prañidhānam (または cittaḥprañidhānam) kartavyam」を「应当発願」と訳しているのであるが、和訳する場合でも prañidhāna (または cittaḥprañidhāna) を「願ふ」(または「願ふの心」とするだけではわかりにくいから「生れたいという」という語を補っているように、初めの個所では「願生彼国」の「願生」を、後の個所では「生彼国土」の「生」を羅什は補足して訳しているのであって、「願生彼国」とあって、「生彼国土」とあっても、両文の意味は同じでなければならぬ。

従って「应当発願」に主意があるのであって、「願生彼国」の「願生」、「生彼国土」の「生」に主意があるのではない。つまりここではあくまで願生心の発起が勧められているのである。

ところで、藤田博士の所説(註)に従うならば、△阿弥陀経▽の原初形態において最初に成立したのは、

若有衆生、聞是説者、应当発願、生彼国土。

までであるから、この『阿弥陀経』前半の最後をしめくくる「まさに願を発すべし、彼の国土に生んと」という言葉は、非常に重要な意味を持つことになる。原初形態において最初に成立した△阿弥陀経▽の結論は、上来説かれてきたことを聞くことによって、この世の衆生が極楽国土に対する願生心を発起することを、釈尊が勧めるということになるからである。

『阿弥陀経』は続いて、東方をはじめとする六方の諸仏が、この「称讚不可思議功德・一切諸仏所護念経」なる『阿弥陀経』を「当信」と、ほめ勧められ(いわゆる六方段)、更に、

是故舍利弗、汝等皆当信受我語及諸仏所説。

と釈尊も「当信受」と述べられ、そして次のようにいわれる。

舍利弗、若有人、已発願、今発願、当発願、欲生阿弥陀仏国者、是諸人等皆得不退転於阿耨多羅三藐三菩提、於彼国土、若已生、若今生、若当生。

と。

この箇所は梵文と対照するとよく分かるので、梵文を見てみよう。

ye keci cchariputra kulaputrā vā kuladuhitaro vā tasya bhagavato 'mitāyusastatāhāgatasya buddhākṣetre
cittaprañihānaṁ kariṣyanti kṛtavanto* vā kurvanti vā sarve te 'vinivartaniyā bhaviṣyantyant-
tarāyāṁ samyaksaṁbodhau tatra ca buddhākṣetra upapatsyantyupapannā vopapadyanti vā。

* 藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』所収)による。

(シャーリプトラよ、およそいかなる善男子たちや善女人たちであっても、かの世尊アミターユス如来の仏国土に向って、「生れたい」という「願」の心(cittaprañihāna)をおこすであらう者たち、あるいはすでにおこした者たち、あるいは現におこしている者たちは、すべて、無上なる正等覚に向って退転しない者たちとなり、かしこの仏国土に生まれるであらうし、あるいはすでに生まれ、あるいは現に生まれるのである。)

この箇所では、要するに「阿弥陀仏国に生れんと欲する者」——阿弥陀仏国に対する願生心を發起する者——は、阿耨多羅三藐三菩提に向って不退転を現生において得ることができ、不退転を得るが故に阿弥陀仏の国土に生れることができるというのである。

ここで想起せられるのは、『無量寿経』のいわゆる第十八願成就文といわれている個所である。

梵文『無量寿経』の相応個所によると、

ye kecit sativās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyain śiṅṅvanti, śrūtivā cāntāśa ekacittotpādān apy adhyāsāyena prasādasahagatenā* cittam utpādayanti, sarve te 'vaivarttikatāyāin saṁtiṣṭhante 'nutarāyāḥ samyaksaṁbodheḥ. (9)

* 藤田博士「梵文補正表」(『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』所収)による。

(およそいかなる衆生たちであっても、かの世尊アミターバ如来の名号を聞き、聞きおわって、たとえ一念(と)いうわずかな時間、一たびの心)の生起でも、淨信にともなわれた深い志向をもって、心を生起するならば、彼らはすべて、無上なる正等覚より退転しない状態に安住する。)

とあるが、シナ訳『無量寿経』の第十八願成就文と対照してみると、「深い志向をもって」というのが、恐らく「至心廻向」⁽¹⁰⁾であり、「心を生起するならば」というのが、「願生彼国」⁽¹¹⁾に相応するであろう。とすると、この個所では、梵文『阿弥陀経』の *prañihāna, cittaprañihāna, cittaprañidhi* という語でもって願生心を表わしているのが、*cita* という一語で表わして、「極樂国土に生れたいという」心を生起するならば」という意になる。

なお梵文『無量寿経』のこの個所には、シナ訳『無量寿経』の「即得往生」に相応する語がない。この『無量寿経』第十八願成就文を『阿弥陀経』のように、願生心を發起したものは、現生において不退転を得ることができる。

という意に解するならば、「即得往生」なる語句は漢訳者が何か別の考えがあつての挿入ということになるのかも
しれない。

さて『阿弥陀経』では、次に、

是故舍利弗、諸善男子・善女人、若有信者、应当發願、生彼国土。⁽²⁰⁾

とこの『阿弥陀経』一經の内容上の総結をしている。

この個所も、梵文では、

tasmāt tarhi Śariputra śrāddhaiḥ kulaputrāṅ kuladhīrjhiḥ ca tatra buddhakṣetre cittapraṇīdhir
utpādayitavyah.⁽²¹⁾

(このゆえに、シャーリプトラよ、ここで、信ある善男子たちや善女人たちによって、かしの仏国土に向つて
〔生れたいという〕願いの心 (cittapraṇīdhī) が生ぜられるべきである。)

とあつて、この世の善男子・善女人たちに、極樂国土への願生心の發起を、釈尊は勧めているのである。従来の
『阿弥陀経』訓読ではやはり「まさに發願して彼の国土に生るべし」と読んできているので、ここでも極樂への
「往生」が勧められていると見なされてきたようであるが、「若し信あらば、まさに願を發すべし、彼の国土に生
れんと」と読み、「まさに願を發すべし」に主意があるのである。

なま prañidhāna, cittaprañidhāna ば、じじひば cittaprañidhī とあせ。

以上、見てきたように、従来の觀念を出来るだけ取り払って『阿弥陀経』そのものの説意に直参して読んでみると、その眼目が浮び上ってくる。

重要な三か所にある「应当発願」という釈尊の勧めは、すべて極楽国土への「往生」の勧めでなく、「願生心の発起」の勧めである。

ところで『阿弥陀経』一經の説意の中心を、極楽国土への「往生」の勧めと見るか、極楽国土への往生を願う「願生心の発起」の勧めと見るか、この二つの見方の相違は、『阿弥陀経』は勿論のこと、『阿弥陀経』を通しての浄土思想の理解にも大きな相違を生ずることになるように思われる。

もし『阿弥陀経』が極楽国土への「往生」を直ちに勧める経とするならば、この現世は苦しみのみ多い所であるから、この苦しみ多い娑婆世界より、はやく楽しみのみ満ちている、すばらしい彼の極楽国土へ生れよという、現世をただ単に否定し、極楽国土へ生れることを讚美することになるのであろうが、『阿弥陀経』は「往生」を直ちに勧めているのではなく、この世の衆生に極楽国土に往生したいという「願生心の発起」を勧める経であるとすると、この「願生心の発起」は、「衆生聞者」、「聞是説者」、「若有信者」という言葉が常に前提となっているように、極楽国土という仏の本願（pūrva-praṇidhāna）によって成就せられた世界（『無量寿経』所説）の依報・正報等を聞くことよって、——仏願の生起本末を聞いて、すなわち仏願に衆生が触れることよって、——衆生は覚めて、はじめて極楽国土に生れたいという願生心を発起することができる。それはこの世をただ単に否定して、彼の極楽国土へ往生しようというのではなく、どこまでもこの苦しみ多い娑婆世界にありながら、仏の本願に触れ、

覚めて、願生心を発起することによって、この世にありながら、この世を超えて行けるのであるというのである。それを『阿弥陀経』では「阿耨多羅三藐三菩提」に向って「不退転」を得るといつているのであろう。

『阿弥陀経』の眼目は、実にここにこそあるといわなければならないと思う。

ところで、この『阿弥陀経』における願生心としての *prañihāna*, *cittaprañihāna*, *cittaprañihī* など、『無量寿経』にも用例が認められるが、⁽²⁾ 原始経典における *pañihī*, *pañihāna* なる語の用例と対照してみると非常に注目すべき事柄が指摘せられている。

藤田博士によると、⁽³⁾

「原始経典の中で最も多く現われる用例ということになると、*pañihī* または *pañihahati* が、来世において転輪聖王とか、王族・バラモン・資産家の大家とかに生まれたり、もろもろの天界に生まれたりすることを「願う」場合に用いられる例をあげねばならない。」

といわれ、『相应部』四一・一〇などをあげていられ、更に、

「ところで、以上の原始経典の用法で注意すべきことは、*pañihī*, *pañihahati* という語が、もっぱら生天・福楽を願うという世間的・在家的な教説の中で用いられており、解脱・涅槃を願うという出世間的・出家的な用法ではほとんど使われていないということである。」

と注意していられる。

最近、平川博士によって、「阿弥陀経」を訳した時には羅什に極樂が浄土であるという認識が無かった」という指摘とあわせて考えるべきことであると思われる。

『阿弥陀経』における *prañihāna*, *citraprañihāna*, *citraprañidhi* は、藤田博士が指摘せられる原始經典の *pañihī*, *pañihahati* の用例の系譜を受けているとすると、在家者が死後、福樂、生天を願って極樂なる世界に生れたいと願う願いが *prañihāna* であり、それは、この世にある誰れでもが持つことのできる願生心であるということである。『阿弥陀経』はこのような極樂国土に向っての願生心の発起をこの世の一切の衆生に釈尊自から勧められているのである。ただしそれは衆生が勝手に持つ願生心ではなく、あくまで釈迦・諸仏が称讚する極樂国土の依・正二報を聞信することを通して、彼の極樂国土へ生れんと「まさに願を發すべし」という釈尊の勧めによって覚めさせられた願生心である。

註(敬称は略す)

- (1) 特に藤田宏達博士の『原始浄土思想の研究』と『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』に負う所が多い。
- (2) 『大正蔵』十二卷、三四六頁、下段。
- (3) 同右、三四七頁、中段。
- (4) 同右、三四七頁、中段。
- (5) ただし京兆慈恩寺基法師撰と伝えている『阿弥陀経疏』では「勸往生」(『大正蔵』三十七卷、三三五頁、中段)とあり、同じ撰者と伝える『阿弥陀経通贊疏卷中』(『東域伝灯目錄』(『大正蔵』五五卷、一一五頁、上段)によれば『阿弥陀経疏』も『阿弥陀経通贊疏』も「基師真偽難定」という。)では「勸生彼国」(『大正蔵』三十七卷、三四三頁、上段)とある。孤山沙門釈智円述という『仏説阿弥陀経疏并序』では「勸願生彼国」(『大正蔵』三十七卷、三五五頁、中段)とある。
- (6) 例えば柏原祐義『浄土三部経講義』(仏教聖典講義刊行会、昭和十年二月発行)によれば、この個所の講説では「この語

を聞いたならば、当にこれを信じて彼の安樂國に往生したいといふ願を發せ。」とあるが、後の「是故舍利弗、諸善男子・善女人、若有信者、應當發願、生彼國土。」では、「されば、舍利弗よ、若し善男善女があって、我が語や諸仏の説かせられる教を信するものは、まさに願を發して彼の安樂國に往生せよ。」とある。

- (7) 窺基撰と伝える『阿弥陀經疏』（『大正藏』三十七卷、三三六頁、中段）
- (8) 窺基撰と伝える『阿弥陀經通贊疏卷下』（『大正藏』三十七卷、三四四頁、上段）
- (9) Sm. Sukh. p. 96 (梵文『阿弥陀經』/ Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part II, Oxford, 1883 所収の Appendix II. Sanskrit Text of the Smaller Sukhāvati-vyūha)
- (10) 既に岩波文庫本の『阿弥陀經』漢訳註（中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『淨土三部經下』一五七頁）、藤田宏達訳『梵文和訳無量壽經・阿弥陀經』の「阿弥陀經註」（二二九頁、下段）に注意せられているごとく、チベット訳では「善男子や善女人はかの仏國土に生れるために、もうものの善根を、つつしんでさし向けるべきである。」となっている。
- (11) Sm. Sukh. p. 96.
- (12) 藤田宏達『原始淨土思想の研究』二二三頁—二二〇頁。
- (13) 『大正藏』十二卷、三四八頁、上段。
- (14) 同右。
- (15) Sm. Sukh. p. 99.
- (16) Sukhāvati-vyūha, édité par A. Ashikaga, p. 42.
- (17) 『仏説無量壽經』卷下（『大正藏』十二卷、二七二頁、中段）。加藤正麿述『願成就文梵漢対弁』（『真宗全書』第六卷所収）六四頁、上段参照。
- (18) 同右。
- (19) 同右。
- (20) 『大正藏』十二卷、三四八頁、上段。
- (21) Sm. Sukh. p. 99.

『阿弥陀経』読解(上)

- (22) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』三八〇頁。
(23) 同右、四〇二頁—四〇四頁。
(24) 平川彰「浄土教の用語について」(『日本仏教学会年報』第四十二号、三頁)。また如谷定彦「初期浄土経典にあらわれた菩薩思想—阿弥陀経—」(『仏教学』第三号、五一頁)参照。

(本学助教授・仏教学)